

上野殿御書

建治元年八月一日 五四歳

態わざと御使それひ有やかたづくり難めでたく候。夫いつについては屋形造りの由目出度くこそ候へ。何か参り候ひて移徙わたまし申し候はゞや。

一、棟札むなふだの事承り候。書き候ひて此の伯耆公ほうき まいに進らせ候。此の経文は須達長者すだつ ぎ おんしょうじゃ祇園精舎を造りき。然るに何なる因縁いか いんねんにやよりけん、須達長者七度まで火災にあひ候時、長者此の由を仏に問ひ奉る。仏答へて曰はく、汝が眷属けんぞく貪欲深き故に此の火災の難起こるなり。長者申さく、さてい如何かんして此の火災の難防をふせぎ申すべきや。仏の給たまはく、辰巳たつみの方より瑞相あるべし。汝精進して彼の方に向かへ。彼方より光さゞば鬼神三人来たりて云はん。南海に鳥あり、鳴忿めいふんと名づく。此の鳥の住処に火災なし。又此の鳥一つの文を唱ふべし。其の文に云はく「しょうじゅてんじゅうてん かりょうびんがしょう あいみんしゅじょうしゃ がとうこんきょうらい聖主天中天、迦陵頻伽声、哀愍衆生者、我等今敬礼」云云。此の文を唱へんには、必ず三十万里が内には火災をこらじと、此の三人の鬼神かくの如く告ぐべきなり云云。須達、仏の仰せの如くせしかば少しもちがはず候ひき。其の後火災なきと見えて候。これに依りて滅後末代にいたるまで、此の経文を書きて火災をやめ候。今以てかくの如くなるべく候。返す返す信じ給ふべき経文なり。是は法華經の第三の卷化城けじょうゆ喩品に説かれて候。委くわしくは此の御房に申し含めて候。恐々謹言。

八月十八日

日 蓮 花 押

上野殿御返事